

たより

『美紗の会』

ニュース

第53号

平成18年4月20日

発行者
「美紗の会」
03-3441-2726
編集責任者
大久保 朋子

春の夜の闇はあやなし

西松 布 咏

春の夜の闇はあやなしそれかよ香やは隠るる梅の花

地唄の「袖香炉」の冒頭の一節である。この唄は新古今和歌集の凡河内躬恒の「春の夜の闇はあやなし梅の花 色こそ見えぬ香やは隠るる」から想を得ている。

現れる容「かたち」よりも目に見えぬ香りが漂うように精進してゆきたいと今年はこの唄を何度か唄うことになった。一月二十八日の宵、フアツシヨンの街、原宿の喧騒を抜け路地にひっそりと佇む「月心居」で舞い手の古沢侑華さんとの共演で唄ったのが初めだった。

ここのご亭主は月心寺の村瀬明道尼のもとに三年間精進料理を修業しごま豆腐の秘伝を授かったNHKドラマ「ほんまもん」の主人公だった。以前テレビのインタビュー番組で拝見した明道尼の、さぞや苦惱の末にたどり着いたであろう枯淡の心境をすがすがしく情熱的に語るお姿にいたく感銘を受けたのでその偶然に驚いた。

方がいらして下さったことがきつかけで精進料理と古典芸能を味わう「恒照会」への出演となり、まさしく闇に光るあやなしの糸で縁を結んでくれた出会いであった。

ちなみに「あやなし」とは訳がわからないとか説明がつかないと言った意味であるがその夜は旬の野菜が織り成す「食の文化」の極みが唄と舞に彩りと香りを添えてくれたようなひとときであった。

二月五日の新潟岩室温泉「高島屋」での「江戸の粋ふたたび」でもこの曲を最後に用意した。例年は県内がどんな大雪でも岩室は雪が積もらないとのことだったが今年はその外と、用心して前日の夜汽車に乗った。燕三条駅に着いた時は人もまばら、雪もまばらであったが、迎えの車の暖かいシートでとうとうとしているうちに漆黒の空から雪が舞い上るように降り始めた。

広い座敷でひとり食事をして、風呂上りに明日の唄のことなどを思い巡らしながら窓を眺めるとふわりと綿帽子をかむった白い庭はますます雪で深くなってゆく。

春の夜に雪がちらちら降るわいな、雪じゃござんせぬあれはお庭のええこぼれ梅！小唄の世界はこれではなくては

……と思うのに明日のお客様の出足が心配になるほどに降り続く様をみて眠れぬ夜と

しかしそれは杞憂に終わり翌日の演奏会は闇にかすかにライトアップされた雪景色の庭がかえって「江戸の粋」をあやなく色どつてくれた。

二月十八日はやわらかな日差しで梅の花が満開となった修善寺で松岡正剛氏が塾長を務める次世代リーダー養成塾「ハイパーコーポレート、ユニバーシティAIDA」の合宿が開かれた。

横山大観や芥川龍之介、初代中村吉衛門もたびたび訪れた老舗旅館を舞台に日本の「間」をテーマとする濃密なプログラムがつつぎと繰り広げられた。目に見えない文化に「間」を伝える為の特別ゲストとして能楽師の大鼓方大倉正之助氏と私、西松布咏が務めた。

死と隣り合わせになりかねない荒野をバイクで疾走しインディアンの地まで大鼓を打ちに行く大倉氏が宇宙と交信する男なら、私は四畳半に正座し己を宇宙にして江戸の音を紡ぐミニナムを世界へと誘う女。その対極は深夜まで続いていた。

そして最後は松岡氏のレクチャー。山本常朝の「葉隠」を取り上げて対立するモノ、矛盾するモノの「間」に身を奉り置くダンディズムの精神とそこに潜む「恋の至極は忍ぶ恋」の心を忘れてはならないと締めくくった。

又氏は「私達は目に見えないところにも「日本」を感じない。それは音の世界だけではない。日本特有の「仕切り」の文化が目に見えない日本を感じさせている。日本流は常に二つで一つ。正直、去来、加減、神の送り迎え、清めと穢れ、ウツとウツツそれらは相反し矛盾していい。ただしその二つを持ち出すタイミングを間違えると「日本」でなくなる。

今回は切なさや揺ぎない意気地をもつ西松さんと和魂（にぎたま）を、礼儀と覚悟とみなぎる生命感をもつ大倉さんから荒魂（あらたま）を感じてもらいたかった」と熱く語った。

大倉氏は能楽堂での舞台を終え深夜オートバイで駆けつけ、葉隠武士のように乱れない姿でソロ演奏や三味線との共演。そして鼓を持たせての実演技の指導へと夜を徹しての奮闘であったが、夜が到着するまで私は初めての唄や三味線に触れる生徒さんとの渾身の稽古に疲れ、ヒシバシと男の火花が飛び交う闇をぬって、会場の隅に交る露天風呂でするりと帯を解き、月光がゆれる湯船にしばしその身体を沈めさせていた。折り返し漆黒の冷気の中に二輪の白梅が咲きこぼれていた。

二月二十二日はかねてより招かれていた舞踏家成瀬信彦氏の「ひそひそ館」を訪問した。白金台からかれこれ一時間ほどの郊外に建つマンシヨンの扉をあけると、成瀬氏ではなく同居人が笑顔で迎えて下さった。間もなく明かりが消されふすまが音もなく開く。そこには兜をかむった白塗りの武士がシンセイサイザリの音の中に立っていた。ただ一人

アテネの桜

寒さが緩み、桜たよりがちらほら聞こえる弥生月に、ギリシャ人の可愛らしい女性が薄桃色のチュウリップの花束をかかえて稽古場にやってきました。「成田ではなくマリタです」とはにかなだように大きな黒い瞳で。

彼女はアテネに住む女優でギリシャ悲劇をもとに作った脚本を自ら演じる為大野一雄舞踏研究所にレッスンを受ける為に来日した。そこで聞いた私のCD「シルクソウル」の声に魅せられたの訪問であった。私の顔をまっすぐ見つめて「舞台の中で日本の音を表現したいので来日中に稽古をつけて欲しい。唄だけでなく三味線も」と。

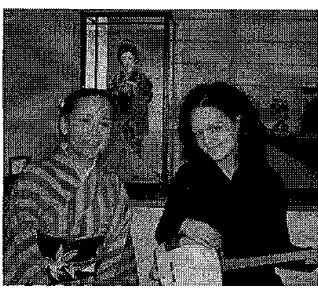
あまりの突飛な願いに一瞬の客である私の為の舞踏が始まったのだ。十五キロある金色の兜が幽かな身の動きに怪しく光る。その下は緋色の袴袴が衣擦れのゆらぎ……

タナトスに向かう武士とエロスの象徴である遊女を。江戸と未来が交差する異次元の世界の中で私ははからずも又不思議な「闇はあやなし」を感じた。かくして今年の春の夜は、闇を透かして梅が香り、どこからか見えない糸で幽かな音が手繰り寄せられて、やがては見えてくるような気配であった。でもそれはまだまだ遠い春の夜の夢かもしれないけれど。

とまどつたが、決意を秘めた情熱的な言葉に私は気がついたらうなずいて来た。たかろうと通訳を交えての三人による三時間ずつの三回の必死の稽古が始まった。座布団も敷かない正座はさすがに辛そうだったが、私の唇を穴の空くほど見つめ「有明のともす油は菜種なり 蝶が焦がれて会いに来る……」と三回目の稽古の時には自分の心から湧きだす言葉のようにゆっくり、はつきり三味線の音を縫って出てくるようになった。

まるで小さな蕾がかすかな音に反応して薄紅色の花びらが静かに開いてゆくようでそれはえいもいれぬ感動であった。春風と共に彼女は、元気に花束を抱えて一週間毎にやってきました。

そして帰国前の最後の稽古日に小さな山桜の一枝を差し出し深々と何度もお辞儀をした。大きな瞳をうるませて……こうして桜が満開になる前にマリタは私の心に小さな花びらを残してアテネに帰国した。いつか舞台に日本の唄が花開くことを約束して。



美紗の会で感じたこと

マリタ・アモリヤン

芸術はあなたを、あなたの存在の深みに連れて行くことができるのだろうか。

芸術に浸ることによって、自分の中にある深い静けさに出会うことができるだろうか。美紗の会で、私はそんな瞬間を味わうことができた。

会場は質素な美しい場所だった。物静かな暖かきで、その場所は私を親密に包み込んでくれた。曇り硝子を通して繊細な光が部屋に入り、私は安らかな静かな気持ちになった。着物を着て座布団の上に座る人々は気高く、その姿はほんとうに耳を澄ます人々のものだった。美しい人々。

その美しさが、この人たちがほんとうに良きものを求めて努力していることから来ていた。それはすぐ見て取れることだった。その美しさはまた、この人たちが、幼な心の喜びを持って、尊敬と理解を持って、他者に対していることから来ていた。彼らの心からの礼儀正しさが美しいのだった。目は心を隠すことはできない。そんな人々が私を、喜びと暖かさとして親しみを込めて受け取ってくれた。

私は心地よく座布団に座り、私のからだはその空間の静けさと人々の純真さに、すっかりくつろいだ。隣りに座って

いた桃色の着物の優しい女性が、私にお茶をすすめてくれた。そして私は、この詩的な楽器がかなでる最初の音を聞いた。

布塚先生は、気品に溢れた薄紫の、春愁色の着物を着て、舞台上に上がった。彼女の座る姿はダイナミックで静謐な安定に満ちていた。

彼女は純真で惜しみなく、気取りなく威厳があり、つましく、そして花盛りだった。伝統的で、かつ完全にアバンギャルドだった。私は彼女の声、彼女の中心を貫いてその存在の本質から力強さを得、その場を清めるように広がっていくのを感じた。

かつて偉大な魂たちが私たちに示してくれた高みを求めて、私たちが努力しないのだったら、何人が「日本人」や「ギリシヤ人」、「インド人」、「中国人」、あるいは「アポリジニ」にするのだろうか。徳のある人になるとはどういうことだろうか。

もし心が閉じていたら、どうしてよいお手前を、よいお茶をいれることができるだろうか。ほんとうに良い芸術家になるとは、どういうことだろうか。

生徒さんたちについて印象的だったのは、誰も声を「聞かせよう」としなかったことだ。日本の人々にとって美的

大きさ、覚悟、梅の香り

川崎隆章

小さな庵、小さな部屋、小さな宇宙……密度の高い小さな世界も面白いが、大きな場所、大きな懐、大きな芸は無条件にいい。いや、本当なら前者の「小さい」とは実は

であることがとても大切であるにもかかわらず、美紗の会では誰も「美しく」歌おうとはしなかった。

声は遠いとおい所から、昔の魂がはるかな距離を旅してきたようにやってきた。その道のりの中で、声はまるで、つまづき、ぶつかり、木の枝に傷ついて痛むかのようにだった。

「秘すれば花」という言葉をもつこの国の人々は、時として非常に私的な内面を明かしてくる。彼らの舞台は、傷つきやすく、真実で、信じられないほど内面的だった。五時間の舞台は、それが半時間に思えるほどあっという間に過ぎた。私はゆったりとくつろぎながら、ほとんど無心に瞑想するように過ごした。あの舞台は、布塚先生がお稽古の時に入れてくださった煎茶のように、甘みがあった。この旅で何度もそうだったが、私はまた神さまに感謝し、それから足どりも軽く春の午後の中へ出て行った。

訳 橋本恵子

大きさの話ではなくその密度の高さと集中度を表しているのであり、後者の「大きな」は物質的な大きさではなく、受け止めた人の心にあらわれスケールの感覚を指しているのだから、字面は対照であるが意味は全く対照してない。小さな宇宙に大きな空間を感じることはできるし、大きな芸を小さな庵で味わうこともできる。

このところそんな理屈で遊んでいたのだが、三月十一日に行われた美紗の会はその事に関係なく「大きなもの」の面白さ、深さを感じてしまった。大きいものは掛け値なしに素晴らしい。

泉クラブ。十五代羽左衛門丈ゆかりの稽古場。質素な外見だが、何より天井が高い。「天井が高い」ことは外見の質素なこととは対照的に、豪華の極みである。人ひとり立居するに十分な高さを越え、天井を高く持ち上げる。大量の「開放空間」が部屋を印象づける、巨大なインテリアのある部屋になる。

天井が高いということは、壁材、柱材、技術ともに量・質ともに高いものが求められる。こんな贅沢はない。

この大きさは、素晴らしいと思った。もちろん、もつと天井の高い場所を知らないわけではないが、これほど存在

感のある空間を持つてはいなかったと思う。この空間に、羽左衛門丈の呼気が満ちていた。大きな芸の世界が、このおらかな空間に、まるごとみっちり詰まっていたのである。そう思うと、この大きさ、豊かさがますます嬉しく感じられる。とことん豪華だ。

美紗の会で名取制度が導入されて何度目の春を迎えただろうか。導入の是非について話しあった夜の事が未だに新鮮に蘇ってくる。

あの時、美紗の会は四半世紀以上の長きにわたって封印してきたものを開いたのだ。封印することで保たれてきた何かが失われるかもしれない瞬間だったかもしれない。この封印はそれほどまでに意味深く、われわれの独自の世界を支えてきたものの一つだったと思う。

しかし、あの時師匠は、われわれに懇々と意義を説き、意見を求め、そしてその封を解いた。われわれはそれに従い、しばらくして兄弟子姉弟子が、あらたな名前と白い反物を授かった。

今回驚いたのは、名取の兄弟弟子の頃に、急にスケールの大きな世界があらわれたという点である。私のような若輩者が生意気を言うようで誠に恥ずかしいのだけれど、これは今までの流れとは違う唐突さで、いきなり「大きな雰囲気」があらわれたのだ。とにかく驚いた。前回の大舞台

での公演も含めて、広がるような大きさを感じたのだ。この大きさも、ほんとうに豪華だと思う。まさに、天井の高い空間のそれと同じで、資材も時間もたっぷりかけたからこそ生まれた豪華さだ。一朝一夕には届かない。憧れる。それに、私だっていつも大きく見せるよう心がけているのだが、兄弟の芸を見てみると、まだまだケレンをつかって華やかに、大きく見せようとしているのだなあ、と感じる。目指すべきはこんな

「大きさ」なのだった。やはり、覚悟されたのだろう。資材と時間をかけた上にこの覚悟があつてのおおらかさ、豊かさなのだろう。これが「名を授かること」のチカラなのだった。あの晩生まれた枝から、こうやって紅梅や白梅が咲きはじめたのだ。梅は小さい花から、万里四方に香りを漂わせる。こんな芸を目指したいと思った。

そして、この枝を大事にしていこう、と、心を新たにした。

編集後記

昨日は、母を連れて、桜吹雪の小金井公園に行つて来ました。梅の花ピラを敷きつめた平日の公園は、とても静かで、久し振りにゆつくり桜の花を見た感じがしました。皆様は、どんな春を満喫していらっしやいますか。

大久保